別紙様式

令和６年度　学校評価自己評価表（最終）

a ミッション	ふるさと世羅を誇りに思い、地域の活性化に取り組む生徒の育成	aビジョン 他者や郷土を大切にし、自ら進んで学び、何事にも一生懸命に取り組む生徒の育成

世羅町立甲山中学校

評価計画						自己評価					学校関係者評価				改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g 達成値	2月 g 達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イ	ロ	ハ	l コメント	m 改善案
【研究主任】確かな学力の育成	基礎学力及びコミュニケーション能力を高め、自発的に他者と協働して課題解決を図る生徒の育成	基礎学力（知識・技能）の向上を図る。	・各種学力調査結果の分析に基づく学力向上に取り組む。 ・各教科の目標達成のために、１人１台端末を効果的に活用する。	・全国学力・学習状況調査及び標準学力調査の結果が全国平均を上回る。 ・「授業でChromebook等のICT機器をほぼ毎日使用した」と回答する生徒の割合（R5　77.8%）	全国平均値以上 90%	全国学テ国＋0.9P 数－3.5P 41.5%（全国学テ62.5%）	標準学テ 国1 +4.4P 国2 +2.8P 社1 +2.7P 社2 +0.6P 数1 -9.2P 数2 -13.2P 理1 -1.1P 理2 -5.9P 英1 -14.4P 英2 -11.2P ④/10教科 40.0% 58.8%（全国学テ62.5%）	40.0% 65.3%（全国学テ69.4%）	D C	いずれの指標ともに目標値をクリアできなかった。 ・基礎的・基本的な学力を身に付けさせるための授業改善、家庭学習の習慣化が不十分だった。 ・7月に比べればＩＣＴ機器の活用頻度は高まったが、ＩＣＴ機器の活用方法に改善の余地がある。	7			・「授業内容がよく分かる」とほとんどの生徒が回答しているが、学力の定着ができていない。家庭学習の時間も少ない。提出物も提出するためだけに勉強をしているように感じる。 ・学力調査の結果明らかになった課題について検討し、生徒の学力向上につなげていただきたい。 ・ＩＣＴ機器の活用を習慣化して基礎学力の向上に努め、家庭学習をしっかり身に付けてほしい。 ・学力定着に向けて家庭学習の習慣化・定着が求められるのは非常によく分かる。小学校でも尽力してまいりたい。	・各教科で小テストを継続的に実施したり、毎日帰りのＨＲ後にドリル学習を行ったりする。 ・５教科の教科書は必ず持ち帰らせ、「毎日ノート（英語）」や「自主ノート（復習）」に取り組む。 ・グループワークやディスカッションなどの対話的な学習場面を増やす。 ・小学校への出前授業や合同研修等を継続的に実施する。 ・授業で動画教材やシミュレーションを積極的に取り入れたり、デジタル機器の効果的な活用に関する事例研修を行ったりする。
		ねらいや目標を具体的に示し、生徒の主体的・対話的で深い学びにつながる授業を進める。	・汎用的な資質能力である「自発性」と「コミュニケー ション能力」の育成を目指し探究的な学習に取り組む。 ・教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びをデザインしていく。	・生徒の「自発性・コミュニケーション能力」に係るアンケートにおける肯定的評価の割合（R5　94.4%） ・各教科の指導において「授業内容がよく分かる」と肯定的に評価する生徒の割合	95% 90%	自発性 92.6% ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力 94.3% 93.5%	自発性 91.5% ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力 93.2% 93.2%	自発性 96.3% ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力 98.1% 103.5%	B A	２つの指標ともにほぼ目標値をクリアできた。 ・目指す姿に生徒と教員で認識の違いが見られたり、教員個人の研究テーマの進捗管理やグランドデザインの更新が不十分だったりすることが課題である。 ・教職員に求められる資質能力の獲得に向けた自己研鑽を行うよう改めて周知する。	7			・自己評価は妥当であり、自発性・コミュニケーション能力は問題ない。 ・課題は改善できるよう取り組んでもらいたい。 ・「授業内容がよくわかる」と学力調査の結果とリンクしない部分があることは分析が必要だと思う。 ・先生とのコミュニケーションをしっかりして、自らの学習の向上を目指して取り組んでもらいたい。	・学力調査と生徒アンケートとの結果のギャップを具体的に要因分析する。 ・授業後の振り返りシートを活用するなど、丁寧な見取りを行う。 ・対話を通じて生徒自身が課題を見出せるようにする。 ・指導する教員アンケートも行い、生徒アンケートの妥当性も検証する。 ・継続的に視点を明確にした授業研究を行い、授業改善を図る。
【生徒指導主事・教務主任】豊かな心の育成	豊かな人間性と自他の良さを認めあえる生徒の育成	生徒の自己肯定感を高め、自信をもたせることで、不登校問題の解決を図る。	・円滑な対人関係を構築するために必要な社会性を育成することを目的にソーシャルスキルトレーニングに取り組む。	・不登校生徒数を前年度より縮減する。（R4:17名⇒R5:11名） ・「自分には良いところがある」と自信をもって回答する生徒の割合（R5　36.1%）	9名以下 50%	11名 66.1%	13名 60.7%	69.2% 121.4%	C A	・目標値はクリアできなかったが、ＳＳＲと支援Co.を中心とした取組により個々の好転状況はみられる。不登校の要因は様々あり、対応への難しさはあるが、今後も、学級集団づくりや家庭・関係機関との連携をしながら、現状から好転する生徒を増やしていきたい。 ・今年度は、SSTの取組や、生徒主体の自治活動の推進に力を入れたことで、生徒の自己肯定感を高めることができた。来年度以降も生徒会を中心とした自治活動を推進し、生徒に対して肯定的な価値付けをしていくことに注力したい。	7			・不登校の問題はデリケートで難しいと思うが、引き続き、取り組んでもらいたい。 ・不登校生徒については、自己評価の説明にもあるように一人一人の理由が様々だと思う。 ・一人でも多くの生徒が学校に出てこられるよう先生方も努力していることがよく分かる。 ・不登校等、特別な配慮を要する子供達の対応は喫緊の課題である。今年度取り組まれた方向性は良かったと思う。引き続き、小中連携を強化していきたい。	・不登校対策については、引き続き、ＳＳＲや支援コーディネーター（教育相談担当者）を中心に、ＳＣ・ＳＳＷ、小学校や町子育て支援課・福祉課、県東部こども家庭センター、療育・医療機関等と連携しながら取り組んでいく。 ・自己肯定感の涵養については、引き続き、生徒主体となるような学習活動や学校行事・生徒会活動等の創意工夫を行う。
		コミュニティースクールを推進し、地域と学校の活動をつなげ、地域に積極的に関わらせ、郷土を大切にする心を育てる。	・町主催、地域主催の行事に生徒が積極的に参加し、役割を担う。 ・学校運営協議会を活用して、各教科等において積極的に外部講師を招へいする。	・「今住んでいる地域の行事に参加した」と肯定的に回答する生徒の割合（R5　83.3%） ・各学年において少なくとも3回以上は外部講師を招へいする。	85% 100%	80.0% 33.3%	76.1% 100%	89.5% 100%	B A	・実際にクリーン大作戦や吹奏楽部による地域行事などに参加しているが、まだ主体性が十分でない生徒が一定数いる。 ・各学年とも学期１回ずつ外部講師を招いて総合的な学習の時間等の授業において指導いただいた。今後も計画的に取組を進めていく。	7			・地域ごとに行事があり、よく参加しているのを見かける。地域と子供たちの触れ合いが多い。 ・自治センターからも単なる参加者としてでなく、地域行事の担い手として呼び掛けていきたいと思う。 ・クリーン大作戦では、中学生がとても素晴らしい活躍をしている。	・「ふるさと学習」を一層推進し、地域のことを知り、体験的に触れ、その未来を考え、深めるような学習活動を系統的に展開する。 ・生徒の学びを一層深められるよう、積極的に地域人材等を活用した学習活動を仕組んでいく。
【教頭】子供と向き合う時間の確保	働き方改革を推進することで、「子供と向き合う時間」と「教師の時間」の確保を行い、職員が健康で高いモチベーションをもって勤務できるようにする。	業務の見直しを行い、超過勤務時間を減らす。また、教職員のタイムマネジメント力を高める。	・毎週１回、定時退校日を設け、年間の授業時数の配分を工夫したり、業務の縮小を図ったりすることにより定時に退校できるようにする。	・毎週の定時退校日の定時退校を実施できた教職員の割合（R4:51.3%⇒R5:54.9%） ・超過勤務時間の合計が、月60時間以下の教職員の割合（R4:78.6%⇒R5:85.7%）	60% 90%	79.1% 94.4%	84.7% 100%	141.2% 111.1%	A A	２つの指標ともに目標値をクリアできた。その主な要因は３点と考える。 ①定時退校やタイムマネジメントに関する指導を徹底させ、一人一人の職員の意識が高まってきたこと ②終業時刻までの出張の場合は「直帰」を徹底させたこと ③定時退校日を５時間授業にするなど、業務に使える時間を確保したこと	7			・自己評価は妥当である。色々な対策を講じながら進めており良いことだと思う。これらの取組で少しでも生徒に向き合う時間や心の余裕が生まれればよい。 ・教職員一人一人の業務について努力されている。超過勤務が減少していることは、とても望ましい。 ・中学校ならではの用務がある中で、この数値は素晴らしいと思う。様々な取組、工夫及び声掛け等が功を奏していると実感した。	・引き続き、タイムマネジメントに関する指導、出張直帰の徹底、業務に使える時間の確保に取り組む。 ・超過勤務時間が生じやすい時季は、業務分担の再調整を適宜行う。 ・「教職員の業務」の一層の効率化を図りながら、可能な範囲で、業務自体の精選を進める。

【自己評価　評価】
Ａ：１００≦（目標達成）　Ｂ：８０≦（ほぼ達成）＜１００
Ｃ：６０≦（もう少し）＜８０　Ｄ：（できていない）＜６０

【学校関係者評価】　イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。　ハ：わからない。